

21世紀アジアの循環型都市へ

愛・地球博から上海万国博覧会へ

原田鎮郎（建築家・2005年日本国際博覧会協会チーフプロデューサー）

リユースされない日本の建築遺産の現状

2007年夏に東京女子大学のOGの方々とお話をする機会があり、その場でレーモンド建築を守る会の方々からキャンパス内のレーモンド建築9棟のうち、学生寮と体育館の2棟が解体されてしまうので何とか残す方法はないだろうかという相談を受けた。8月4日の猛暑の中、高校生のためのオープンキャンパスの日を選んで建物を見学した。東寮は深い緑の中にひっそりとたたずんでいた。もともとは東西に寮のウイングがあり、塔を中心にシンメトリーであったものが西寮は既に解体されタワーと東寮のみが残っている。立ち入り禁止になっていたが鍵のかかっていないドアを開け、内部に人氣はなかったので入ると、既に階段の手摺などの解体が始まっていた。木造の階段を上り2階に行くと、蒸し風呂のような室内で実測をしている金澤良春氏に出会った。金澤氏は坂倉事務所時代に故西沢文隆氏の薫陶を受けた方であり、大学の許可を得て解体寸前のレーモンド建築の実測を続けていたのである。保存運動をしていても明日にも解体が始まるかもしれないので、やむにやまれず実測を始めたという。

それから1時間ほど流れる汗をぬぐいながら、金澤氏に寮のタワー部分の地下から2階までをくまなく案内してもらった。タワー部分の洗濯室、調理室、料理を運ぶダムウェイター、コイン式のガスコンロ、雨水利用の水洗トイレ、煙突と採光と換気の3つの機能を果たした中央部のタワーなど、まさにわが国の先駆的の女子寮のアーカイブであった。1920年代に全学生に個室を与え、祈りと談話の場であるパーラーを設けた新渡戸稲造の理想の高さとそれに意欲的に応えた若き日のアントニン・レーモンド（1888～1976年）の熱意が感じられた。そして、ここで生活したOGたちがなぜあのように東寮の保存に強い思い入れを抱くのか、少しは理解できた気がした。しかし、それから間もなくしてこの東寮はタワーと共に壊されてしまった。そして、東寮を囲むように成長していた樹齢80年を超える大樹もまた同時に切り倒された。

壊された理由は新校舎の建設に邪魔になるということであった。私がキャンパスを歩いた経験からは、もし大学の理事会がどんなことをしても東寮を残してリユースするという方針をはっきり打ち出せば、配置の代替案もつくれたのではと思う環境であった。これから激化する大学間の生き残り競争の中で、新興大学が決して真似ることができない建築遺産が、かくも簡単に消えてしまった。90年近くの歴史を持つ名建築でもこのような運命をたどるのである。

わが国においては、建築物は多くが経済的評価によって運命が決まってしまう。歴史的建築を保存し新たな生命を吹き込むのもリユースのひとつの手法である。本来、建築のリユースとは経済的価値のみならず、環境的価値、そして文化・歴史的価値が総合的に評価されて実施されるべきものである。2005年日本国際博覧会（以下、愛知万博）は、わが国のリユースの新しい流れをつくり出したいと挑んだものであったが、本格的なリユースの社会実験を行うことができなかったという思いが強い。愛知万博のリユースとこのような歴史的建築物の保存の問題を同列に語ることはできないが、両者の背景には同じ文化的土壌が見える。

ハノーバーから愛知、そして上海へ

中国2010年上海万国博覧会（以下、上海万博）予定地では2010年の国際博覧会に向けて、中国の威信をかけた会場建設のピッチが上がってきた。愛知万博が終わって2年半、上海万博まで2年余のふたつの博覧会のほぼ中間時点で、両方の博覧会を比較しながらそれぞれの博覧会の目指したものを、そして引き継がれるものについて考えてみたい。

20世紀最後の博覧会は、2000年のドイツのハノーバー国際博覧会（以下、ハノーバー万博）であった。そして21世紀最初の2005年の愛知万博、2010年の上海万博へと続く。21世紀という新しい世紀に入って万博が愛知、上海とアジアで連続して開催されるということは、157年の万博の歴史の中で新しい時の流れを象徴的にしている。1851年のロンドンに端を発する万博は、19世紀にはヨーロッパを中心に持ち回りで開催され、やがて20世紀に入るとアメリカ・カナダへと広がる。アジアでの万博は1970年の日本万国博覧会（以下、大阪万博）まで待たなければならない。19世紀の万博では、主に各国の珍品、奇品としての美術品、民芸品などが展示された。万博の建築は第1回ロンドン万国博覧会の



東京女子大学東寮
（設計：アントニン・レーモンド）*



東京女子大学学生寮タワー*

日本万国博覧会 EXPO'70

期間 1970年3月14日～9月13日
会場 大阪府吹田市（現在は万博公園）
テーマ 人類の進歩と調和
（本誌7005掲載）



大阪万博シンボルゾーン。丹下健三設計のお祭り広場と岡本太郎による太陽の塔を見る。

クリスタルパレスをはじめとして、1889年フランス独立200年を記念するパリ万国博覧会でのエッフェル塔、1967年モントリオール万国博覧会（本誌6708）のフラードームやモシェ・サフディの集合住宅（ヒタ 67）、そして、1970年大阪万博の丹下健三の大屋根（日本万国博覧会・お祭り広場：本誌7005）など、都市や建築の近未来を感じさせる空間が提示され続けてきた。しかし、一方で20世紀末になると情報化社会の中で、半年の期間中に何千万人もの人が1カ所に集まる万博というイベントを継続することを、疑問視する声も上がっていた。BIE（Bureau of International Exposition / 国際博覧会協会）は1994年に、これからの国際博覧会は、従来の見本市や商業主義的な展示会とは一線を画して、「人類の知識の向上や相互理解と国際協力の場とすること」「自然の尊重や環境を配慮した会場をつくり上げ、質の高い文化的、芸術的な舞台とすること」「現代社会の要請に応えられる大きなテーマを掲げ、すべての参加者がそれを主体的に十分に表現すること」の場としたいという基本方針を発表している。そして迎えたハノーバー万博は、入場者予測4,000万人に対して実際の入場者は1,800万人に留まり、BIEは愛知万博を、かなりの危機感を抱えながら迎えた。

この原稿を書き始めるにあたって、BIE前事務総長のオーレ・フィリップソン氏に、2000年のハノーバー万博、2005年の愛知万博、そして2010年の上海万博に関する感想と見通しを聞いた。自他共に認めるミスター EXPOであるフィリップソン氏の総合的な視野からの意見をまず聞きたかったからだ。フィリップソン氏は1997年愛知万博の開催が決まった時のBIE事務局長であり、愛知万博会場をめぐるさまざまな紆余曲折についても熟知しており、また、世界各国の有識者からなる愛知万博諮問委員会の委員長として、いろいろとアドバイスをしていただいた。

フィリップソン氏はまず「ハノーバー万博においては、その基本テーマ『人間・自然・技術』に最も忠実なのは主催国ドイツのパビリオンであった。万博は基本テーマに基づいて参加各国の展示やイベントが企画されるが、多くの参加国は基本テーマよりもいかにして多くの来場者を確保するかに関心が向きがちで、基本テーマは二の次にされることが多い。この傾向はハノーバーにおいても同様だった」という見方を示した。

フィリップソン氏は同時に愛知万博に関して、「基本テーマである『自然の叡智』が計画にも運営にも徹底して反映された最初の博覧会であったとBIEは認識している。中には従来のように基本テーマからかけ離れた展示内容のパビリオン

も散見されたが、総合的に見て基本テーマの周知徹底の度合いは高かった」と評価している。

このように総合点として高い評価を受けた愛知万博は、入場者予測1,500万人に対して2,200万人の入場者を記録し事業面でも大きな余剰金を生み、大成功したと言われている。愛知万博開催中にドイツパビリオンを訪問し館長のインカ・ピットシャイト女史と話す機会があった。館長はハノーバーと愛知を比較して両者の違いのひとつにマスコミキャンペーンを挙げた。「ハノーバーの場合は開幕と同時に万博の評価に関してマスコミの手厳しい報道がなされて、それが来場者の出足をひどく鈍らせる原因になった。その反面、愛知万博は地元のマスコミを中心に、この万博を暖かく支援して成功させようという動きが顕著でとてもうらやましい。このような暖かいマスコミのキャンペーンがあったら、ハノーバー万博も違った展開を見せていただろう」というコメントが印象的であった。

ハノーバー万博は環境をテーマにしながらも、会場建設で環境破壊が大きかったこと、環境NGOの不参加が多かったこと、真面目ではあっても堅苦しく、楽しさに欠ける展示が多かったことなどがマスコミに取り上げられた。しかしながらパビリオン建築ではオランダ館（本誌0008）、日本館（同0008）などに環境に対する新しい挑戦が見られた。

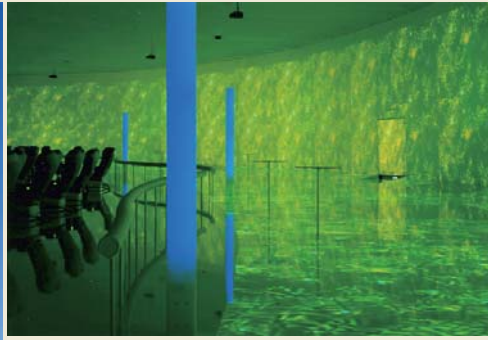
オランダ館はMVRDVの設計で立体化された人工地盤によってさまざまな地球上の環境が再現され、地球環境保全のメッセージを発信し、日本館は坂茂の設計による紙の建築として注目を集めた。この紙の建築材は、博覧会終了後ドイツの小学校の教科書やノートに生まれ変わることになった。また、伊東豊雄は健康館のインスタレーション（同0008）で、幻想的な休息空間をつくり出した。なお、フィリップソン氏は上海万博については現在進行形であるとして、明確なコメントは避けた。上海万博は入場者数において今まで最高であった大阪万博の6,400万人を超えることは確実視されているが、その反面で、どれだけ環境配慮型の万博ができるのか懸念を抱いているようでもあった。

愛知万博の経緯 モジュール方式パビリオンの試み

愛知万博は基本テーマが「自然の叡智」であり、計画の当初から環境アセスメ



上：MVRDV設計のオランダ館。人工地盤が積層されている。
右：坂茂設計の日本館。構造材として紙管が使われている。



上：伊東豊雄による健康館のインスタレーション。
右：会場配置。



ハノーバー国際博覧会

期間 2000年6月1日～10月31日

会場 ドイツ連邦共和国ニーダーザクセン州ハノーバー市

テーマ 人間・自然・技術

(本誌0008掲載)

ントを自らに課するという高いハードルを設定してきた。今までの経過の概要は以下の通りである。

1988年10月に21世紀初頭の国際博覧会誘致が地元で合意される。名古屋市は1988年のオリンピック誘致合戦において韓国のソウルに破れ、国際博覧会誘致に方向を転換したと言われている。1990年には博覧会用地として瀬戸市の南東部が選定され、1994年には博覧会誘致委員会が650ヘクタールの会場の構想を発表した。1995年にBIEへの開催申請に際して希少種が生息するエリアを避け540ヘクタールとし、環境影響評価(環境アセスメント)などを行うことを決定した。そして、1996年6月に日本政府はBIEに2005年の国際博覧会の開催を申請した。1997年6月に日本開催が決定し、同年10月には日本国際博覧会協会が設立された。しかし、その後計画地内でオオカカの営巣が確認されたこともあり、2000年には会場を長久手町の青少年公園と瀬戸市の海上地区に変更することになった。2001年に愛知万博事業に関する基本原則を公表して、それに基づいて7月に私を含むプロデューサー体制がまとまり、12月に基本計画が発表された。この基本計画の中でグローバルループ、グローバルコモンの基本的な考え方が初めて示された。

長久手会場は青少年公園の施設や地形を活かし、閉幕後に公園に戻すことを前提に会場設計をした。大幅な地形の変更がゆるされない条件なので、野球場やテニスコートなど既に平坦地であるところを利用して公式参加国のパビリオンを建設するグローバルコモンとした。コモンはアジア、アメリカ、ヨーロッパ(2)、アフリカ、アジア・オセアニアの6カ所とし、このグローバルコモンによって公式参加国のパビリオンを建設するエリアは確保された。問題は、高さや位置が異なるそれぞれのコモンをどのようにバリエーションで

結ぶかであった。この難問は構造設計の新谷真人氏の協力を得て、幅員21m、1周2.6kmの空中回廊、グローバルループによって解決した。

公式参加国のパビリオンは、大阪万博のような土地渡しで各国が自由にパビリオンを建設する方式ではなく、モジュール方式と呼ばれる1辺18mの空間ユニットを博覧会協会が建設し、参加各国は最大5モジュールを限度として、その外装と内部の展示工事を行えばすむようにした。このモジュール方式によって参加国、特に発展途上国の参加負担が軽減し参加国の数が増えること、会期後のリユースが促進されることを期待した。

リデュース・リユース・リサイクル実践の万博を目指して

会場設計や建設工事におけるハード面の3R(リデュース・リユース・リサイクル)の環境指針を検討していただいたのが、日本建築センターの下に設置された早稲田大学木村建一教授を委員長とする「2005年日本国際博覧会3R型建設手法の検討に係る調査委員会」であった。メンバーは椎野潤氏(早稲田大学教授)、野部達夫氏(工学院大学助教授)、深尾精一氏(東京都立大学教授)、松村秀一氏(東京大学助教授)、横山浩一(中部大学教授)、山羽基氏(中部大学助教授)、渡辺仁史氏(早稲田大学教授)であった(肩書きはいずれも2003年当時)。

この委員会において3Rに関するさまざまな提言がなされたが、要点は以下の建設ヤードを設ける提言に集約される。

「建設ヤードを設ける。建設ヤードにおいて建設部材のプレアッセンブリを行い、会場周辺の建設車両を削減する。また中古材の活用を進める。そのためには建設ヤードの中に中古機器や部材をリファービッシュして性能保証を行う機

能を持たせる。同時にそれらを一時保管する機能を持つ。博覧会で使用した部材や機器のリユースに関しては、同様に整備し性能保証をして一時保管する。これは建設時の中古材の使用と逆の流れを行うことになる

しかしながら、建設ヤードの提言は日の目を見ることはなかった。万博という社会実験の機会に建設ヤードが実現できなかったのは悔やまれることである。できなかった言い訳はいくらでも挙げることができるが、大きな社会的な挑戦のチャンスを逃してしまった。最も現実的な制約条件としては、中古材の利用を促進するとすれば確認申請においてもすべての中古材の性能保証が求められ、その手続きの煩雑さと時間の増加によってスケジュールが間に合わなくなるというものであった。

一方、環境アセスメントによってこれ以上の工事が発生することは認められないという見方もあった。しかし、現場での工量と工事用車両を削減するための建設ヤードが、ヤード本体の建設工量が増えるというだけで実現できないというのは自縄自縛であり、大所高所からの総合的な判断を行うべきであった。

委員会は再三、リユースはあらかじめ後利用を決めておき、万博は6カ月間の前利用として位置付けるべきであると提言した。しかしながら、その実現のために博覧会協会としては、設計時にあらかじめリユース先を決めて、設計や環境部門に対応する組織、スケジュール、予算を配慮すべきであった。設計は少なくとも半年は前倒しで進めなければならなかったと言える。

愛知県下の公立学校、公共施設などの整備計画と照らし合わせてリユース計画が進められたら、後述する旧下山村（現豊田市）の巴ヶ丘小学校のような事例がもっと生まれたのではなかったかという思いが強い。ただ、そこまでさかのぼって言及すると、われわれがプロデューサーに就任するのも遅すぎたことになる。プロデューサー就任以降のわれわれには、万博とリユースを同時に同等に捉えて設計するという時間的余裕はなかったというのが正直なところである。

建築のリユースは経済的な効果のみで推進しようとしても、新築工と比較して明確な効果が見えにくいという問題を抱えている。つまり新品とリユース品を利用する場合のトータルな価格差が小さいのである。このままでは、わが国における建築のリユース市場が大きく伸びるとは考えにくい。この現状を打破しようとするれば、現在、経済的な指標のみしかないリユース市場に新たに「環境」の指標を加えることを提案したい。リユースは、リサイクルに比較して多くの熱エネルギーを必要としないことから、環境貢献のポイントを付加する仕組みをつくり上げるのである。万博を契機に始まり、現在も活動が続くEXPOエコマネー*1のような仕組みである。この仕組みに参加する企業には、新しい経済的なメリットに加えて社会的評価が与えられ、同時にそのような製品を積極的に受け入れる消費者サイドの新たな価値観の醸成と共有も求められる。

博覧会施設のリユース

建設ヤードは実現できなかったが、各施設の設計者は3Rを念頭においてディテールを工夫して会期後のリユースにそなえた。また委員会からは、リユースにおいては運搬コストを軽減させることも重要であることから、中部地域内では中部国際空港の人工島の一部と対岸の臨空都市プロトンアイランド計画の中に組み込むこと、また東海地震の予備対策施設への転用などを検討することが提言された。しかし、現実には万博の建設スケジュールに追われる中ではリユースは博覧会終了後に広く可能性を探るという方針にならざるを得なかった。けれども、博覧会が開幕すると、実際の対象となるものが目の前に展開していることもあって、さまざまなリユースに関する問い合わせや検討作業は増加した。その中の取り組みのひとつに飛行船格納庫の計画があった。グローバルループのトラス構造のリユースとして、ツェッペリン飛行船とゆかりのある自治体が格納庫建設と公園整備を一体化する計画であった。

また、2007年に静岡県で開催された技能オリンピックの施設に、外国館のモジュールを再利用する検討も行った。しかし、いずれも新築と比較して一長一

短があって実現できなかった。だからこそ、3R型建設手法の建設委員会の「先に後利用を決めて万博はその前利用にする」というアドバイスを、その後の上海万博の関係者にたびたび伝えた。

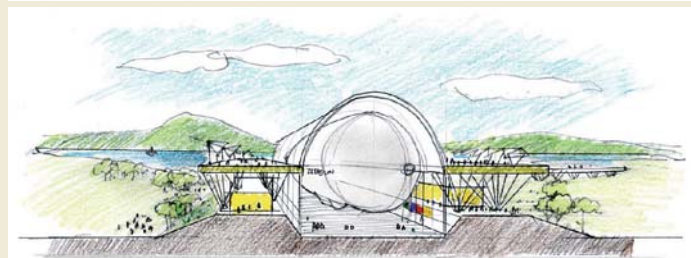
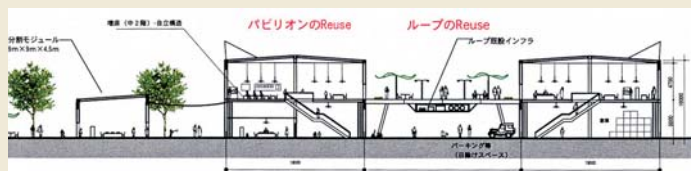
実現した施設の再利用

実現した博覧会施設の再利用の概要は、以下の通りである。

瀬戸愛知県館（設計：第一工房、本誌0505）は外壁木材が豊田市立（旧下山村）巴ヶ丘小学校の外壁などに活用された。このリユース計画は、瀬戸に近い下山村から産出された良質の木材を利用して愛知県館の外壁を仕上げ、博覧会終了後に再び下山村に返すという方法が取られた。これはまさに3R型建設手法の検討に係る調査委員会で指摘された博覧会資材を前利用した事例と言える。

長久手日本館（設計：日本設計、同0505）は建物全体は仮設建築として計画されていたので、建物の丸ごとのリユースは検討されなかったが、日本館を構成するすべての部材に関しては、今後のリユース促進のためのモデルケースとして、ICタグによる部材情報が管理されてオークションシステムによって多くの部材が引き取られた。その概要は、以下の通りである。

全体の入札成功率（落札率）は47.4%であった。中でもエレベータ、厨房製品、電化製品、などの設備機器などが100%、展示品63.9%、環境製品60.4%などの落札率が高かった。特に展示品、環境製品に関しては、万博で使われたというプレミア的な価値が付いたと思われる。



上：パビリオンのリユースイメージ。*

中：パビリオンの飛行船格納庫へのリユースイメージ。*

下：瀬戸市の民間工場へのパビリオン・リユース。*

外国パビリオンのリユースは以下の11館31モジュールについて行われた。コモン1の大韓民国の5モジュール、インドの4モジュールの9モジュールが県下の家具工場に活用された。

コモン1のカタールの2モジュールが県下の金属塗装の工場に活用された。

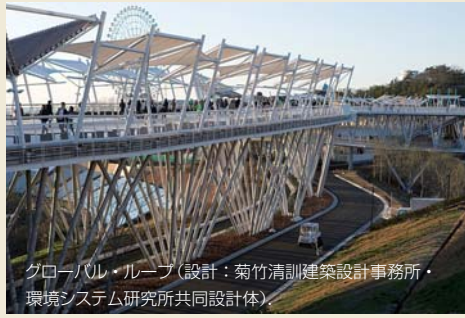
コモン4のオーストリアの2モジュールが県下の金属加工工場に活用された。

コモン4のベルギー、スイス、欧州共同館、イギリスなど18モジュールが瀬戸市内の新設工場に活用された。

迎賓館・レセプションホール（設計：日建設計、同0505）は、万博博物館として活用された。



会場鳥瞰CG



グローバル・ループ(設計: 菊竹清訓建築設計事務所・環境システム研究所共同設計体)



迎賓館・レセプションホール(設計: 日建設計)



長久手日本館(設計: 日本設計 左)と名古屋市パビリオン 大地の塔(全体統括・企画設計: 電通 右)



スペイン館(設計: foa)の外壁に組み上げられた6色のセラシア(格子窓)



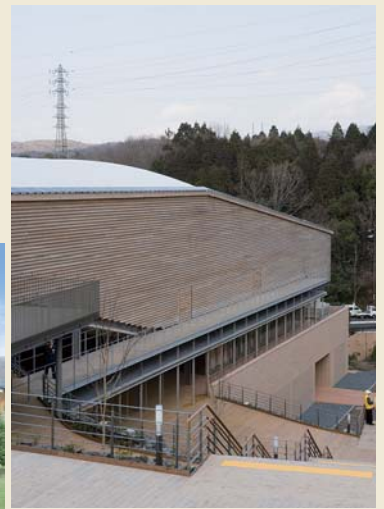
瀬戸愛知県館を恒久施設として改修したあいち海上の森センター(設計: 第一工房)

2005年日本国際博覧会(愛・地球博)

期間 2005年3月25日～9月25日
会場 愛知県愛知郡長久手町・豊田市・瀬戸市
テーマ 自然の叢智
(本誌0505掲載)



川上中学校(設計: エーシーエ設計) CGバース。瀬戸愛知県館(設計: 第一工房)。上部が仮設のパビリオン。万博終了後、恒久施設として改修された(上の写真)。**



民間パビリオン2館は、民間のテーマパークに移設され活用されている。名古屋市パビリオンの巨大なカレイドスコープは、移設再利用がなされている。その他の資料に関しては、77kVの特高変電所が県下の民間企業に、愛・地球広場のステージにあったLEDアストロビジョンは名古屋瑞穂陸上競技場に引き取られて活用されている。

カナダ館(本誌0505)の正面を飾ったカエデの葉のモニュメントは、カナダのミササガ市と姉妹都市の関係にある愛知県刈谷市の公園に引き取られた。また、グローバルループ上にあったベンチやドライミスト、各コモンにあったテント付きベンチ、屋外照明塔、車椅子、電動カート、グローバルトラム(電気自動車)、自転車タクシー、太陽光発電施設などは、全国の市町村、企業、個人に有償あるいは無償で譲渡されている。

変わったところでは、若手アーティストさとうりさ氏のアート作品「プレイヤーズエイリアン」が長野県川上村に引き取られ、今春、完成する村立川上中学校の前庭に再建されて毎朝生徒たちを迎えることになっている。またこの川上中学校には、カナダパビリオンで使われていた木製の階段も再利用されている。もともとこのカナダ館の階段は、カナダで木造の橋の部材として使われていたものの再利用であったので、川上村で3度目のリユースの役割を果たすことになる。愛知県の旧下山村、そして長野県の川上村は共に林業が盛んだ村である(川上中学校の新校舎は主要部分がすべて地元のカラマツである)。このような林業の村で、生徒たちがリユースされた木材が使われている校舎で学ぶことは生きた環境教育の素材となる。

建築の循環を受け入れる社会の土壌

愛知万博は環境万博と言われ、会場用地の決定までのさまざまな変遷にも常に「環境」の2文字が付いて回った。完成した博覧会場には、地球環境に配慮した最先端技術が導入されて、21世紀の近未来的なモデルを提示することができた。会場内で発生したゴミを原料にした燃料電池発電や太陽光発電による電力供給がなされ、レストランでは生分解性プラスチックの食器で食事が提供された。また、未来社会の体験はハード面のみならず、自然環境に配慮した人びとの意識やライフスタイルを変革させる試みが随所に行われた。ゴミの9分別は有効なリサイクルへと結び付けられ、環境に配慮した社会行動によってポイントが貯まっていくEXPOエコマネーの社会システムは、万博終了後も活動が継続されている。

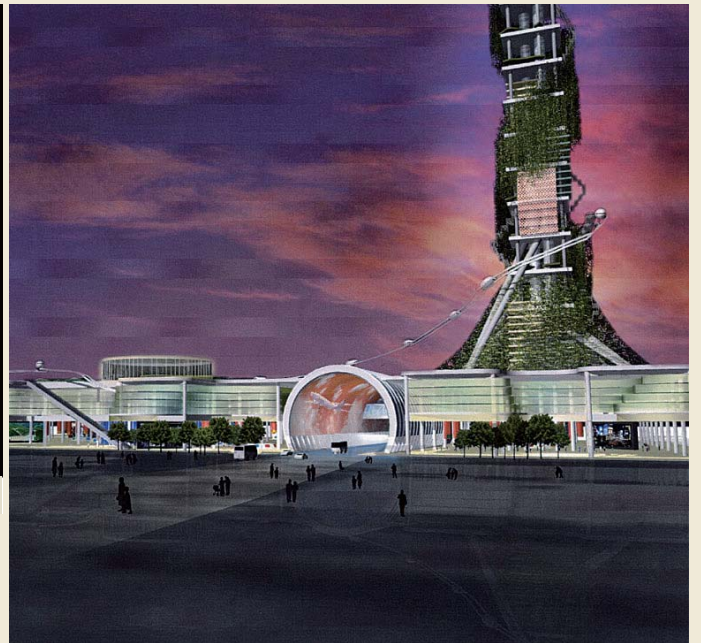
この新しい試みは、多くのボランティア、NGO、NPOの参加なしには考えられなかった。従来は国と企業に加えて市民の参加が実現し、3者が一体となって大きな力を発揮した点が、愛知万博が150年余の博覧会史上で果たした最大の貢献だったと私は感じている。この総合力がBIEにも高い評価を与えさせたのであろう。しかしながら今回のメインテーマである建築の3Rという領域に限定すれば、リユースという新しい社会システム、市場をつくり出すきっかけにはならなかった点が残念である。ただ愛知万博においてさまざまな芽生えた市民の環境意識が、いずれは建築の循環の新しい流れを受け入れる社会の土壌を生み出すことを信じている。



总平面图

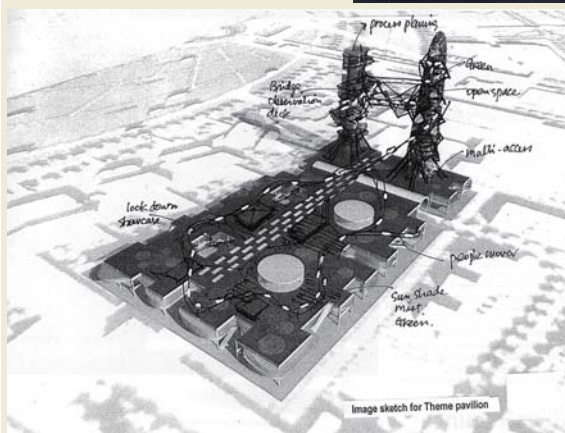
上：会場マスタープラン。***

左：上海社会科学院の『社会科学報』*



上：上海万博 サステナブルタワー CGパース。*

左：上海万博 サステナブルタワーイメージスケッチ。*



中国2010年上海万国博覧会

期間 2010年5月1日～10月31日(予定)

会場 中華人民共和国上海市

中心黄浦江兩岸 南浦大橋と盧浦大橋間の濱江地区

テーマ より良い都市, より良い生活

21世紀アジア型の都市居住モデルの提案

愛知万博が準備段階の2003年ぐらから、上海万博の博覧会協会である上海世博協調局との交流がさまざまなかたちで活発化してきた。アドバイスを求められる機会があることに一貫して提案してきたのは、上海万博のテーマ「より良い都市, より良い生活」を具体的に体験できる住環境をつくり出すことであった。テーマ館の計画のアドバイスにおいても、20世紀欧米型ではない21世紀アジア型のコンパクトシティをつくり、来場者が居住体験ができる都市モデルを提案してきた。テーマ館で難しければ、博覧会場浦西地区の世界各国の都市が参加する都市実験区に博覧会後も残る住環境をつくることも提案した。このような都市居住モデルを提案し続けたのは、愛知万博の会場設計はひとつの都市モデルであり、このコンセプトを生かして、上海万博では住環境を実現しなかったからである。本来であれば、愛知万博の後利用において各コモンのエリアに住宅を配置して、グローバルループで結び都市モデルをつくりたかった。それが実現できなかったので、何とか上海に形態は異なっても新しいアジア型の都市住居モデルをつくりたいと思い提案を続けた。しかしながら、現時点では上海万博においては新しい都市居住のモデルをつくる企画は聞こえてこない。2007年初めに、上海市政府のシンクタンクである上海社会科学院の特別研究員、朱曉雲女士(部門経済研究所上海創意産業研究中心公共芸術企画部のディレクター)の要請を受けて同院が発行している週刊新聞『社会科学報』に共同執筆するこ

とになった。本年3月中に3回目の連載が完了し、6月頃に4回目の最終連載でシリーズが完了する予定である。過去3回の連載の中で緑豊かな自然環境と共存し、愛知万博のグローバルループのようなヒューマンな歩行空間を、インフラストラクチャーに持つ都市のイメージを語った。自動車よりも人間系に近いさまざまな移動システムが、歩行空間の上を動く都市のイメージが固まっていた。上海万博の会場整備はほぼ骨格ができてきた。今から新しい都市居住モデルを会場内につくることは難しいかもしれない。しかし、たとえ上海万博の閉幕後においても、上海万博に集結するであろうさまざまな「より良い都市, より良い生活」をつくり上げる機器や素材、社会システムのリユースを組み込んで、21世紀アジア型都市環境の構築に参加できればと思っている。

*1：愛・地球博で地球温暖化防止や循環型社会の実現を目的に、協会事業のひとつとして実施された環境通貨の実験事業。

特記以外撮影：本誌写真部

*写真・図版提供：環境システム研究所

**図版提供：エーシーエ設計

***図版提供：中国2010年上海万国博覧会公式ホームページ